

# 障がい者スポーツにおけるノーマライゼーション社会形成の可能性

スポーツマネジメントゼミナール 1314020 久保田 茉貴

## 1. 研究動機・研究目的

日本において障がい者が行う運動・スポーツは、健常者が実施するような運動・スポーツのように参加の機会が十分に整備されていないのが現状である。障がい者スポーツは、機能回復訓練を目的とした医学的リハビリテーションを起源とし、その後、障がい者が自発的にスポーツ活動を実施したことから、競技スポーツへと発展していくこととなった。しかしながら、日本において障がい者スポーツに対する社会的認知や理解は歴史的にもまだ浅く、障がい者のスポーツ参加に対する支援体制や受け皿はまだまだ整っていないのが現状である。

そこで本研究の目的は、地域レベルでの障がい者スポーツ実施者を対象に、障がい者がスポーツに参加する上でどのようなバリアを感じ、どのような支援を必要としているかを明らかにすることである。また、今後障がい者におけるスポーツ参加を促進するために、必要とされる支援の基礎資料を得ることである。さらに、障がい者がスポーツを通じ積極的な社会参加を可能とする、ノーマライゼーション社会の形成の方法について検討することを目的とした。

## 2. 研究方法

### 1) 文献研究

本研究では、障がい者および障がい者スポーツを取り巻く環境に関する情報の収集をし、文献研究を行った。

### 2) アンケート調査

(1) 調査対象：東京都内にある T 障がい者総合スポーツセンターに通い、調査への協力を得られた 60 名(男性 39 名、女性 21 名)とした。年齢は 5 歳～85 歳であった。小学生以下のアンケート調査に関しては、同席していた保護者の協力を得て実施した。アンケート用紙は直接配布し、記入後回収した。

(2) 調査期間：2017 年 7 月 28 日と 8 月 11 日の 2 日間に渡り実施した。

(3) 倫理申請：順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科等倫理委員会による審査結果に基づき、承諾を得て調査を実施した(順天堂大学大学院倫理審査第 29 - 129 号)。また、事前に関係者に調査内容を示し、確認と同意を得た上で調査を行った。

(4) 調査項目：

- ① 個人的属性
- ② 運動・スポーツに関する意識
- ③ 練習環境に対する改善点・期待
- ④ 必要とする支援

### 3. 主な結果と考察

T 障がい者総合スポーツセンター利用者を性別にみると、男性が 65%、女性が 35%と男性の割合が高い結果となった。年齢別にみると、60 代以上の割合が半数を占めており、スポーツセンターにおいても高齢化がみられた。また、運動を始める年齢においては 10 代未満・50 代の割合が高く、運動開始年齢において二極化がうかがえた。

運動・スポーツを開始したきっかけとしては、家族や友人・同僚からの誘いや奨めによって開始したという声が多く、障がい者のスポーツ参加において、周囲の人々からのアプローチが大きな要因の一つとなっていた。

実施理由としては、『健康志向のためのスポーツ』、『余暇・趣味としてのスポーツ』、『コミュニケーション手段としてのスポーツ』の 3 つが大きな軸となっており、スポーツを通じた仲間づくり、コミュニケーションについての記述も多く得られた。この結果から、障がい者にとってのスポーツとは人との交流を広げる、深めるための有益な手段の一つであることが明らかとなった。

障がい者のスポーツ参加に関して求められている点として、練習環境の充実、情報サポートが多く挙げられた。

### 4. 結論

利用者の多くは余暇の一つとして、また健康な身体を維持するための手段として、スポーツを実施していることが明らかとなった。そのために、長く続けていくことのできる障がい者スポーツであり生涯スポーツであること、およびその環境整備が求められている。

また、障がい者スポーツにおいて女性のスポーツ参加の割合が低いことも明らかとなり、様々な理由からスポーツ参加の機会を得られずにいることが考えられる。今後は、現在スポーツを実施していない女性をターゲットとしたアプローチも考えていくべきである。

運動実施においての問題点としては、身体的側面・心理的側面・環境的側面の大きく 3 つの要因が挙げられ、今後は様々な障がいの種類や性別等のダイバーシティに対応すること、より個々に合わせたスポーツスタイルやその環境を提供することが求められている。

ノーマライゼーション社会の実現に向け、運動・スポーツの側面からアプローチをしていくために、より多くの障がい者が参加することのできる環境や機会を支援していくことが最優先の課題である。また、障がい者や健常者の境なく、一緒に楽しむことのできるようなプログラムや機会の創造も必要とされる。

### 5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、丁寧かつ熱心なご指導を受け賜りました、指導教員の小笠原悦子教授に深く感謝致します。また、本研究の調査のためご協力いただいた、障がい者総合スポーツセンターのスタッフの皆様、貴重なお時間を割いてアンケート調査に協力していただいたセンターに通う皆様に心から感謝いたします。そして、共に卒業論文を書き上げた同じスポーツマネジメントゼミナールのゼミ生のみなさんに感謝します。ありがとうございました。